



新たな一步を踏み出す!

NPO法人化に向けて

〇 設立総会が開かれました!!

我が「チェルノブイリ救援・中部」を、「特定非営利活動（NPO）法人」にするための設立総会が、10月23日（土）13時から、名古屋駅前の中小企業センターで開催されました。



正会員総数 83 名中、「書面出席」を含めて 65 名の出席があり、設立趣旨書・定款（役員を選出を含む）・2 年間の事業計画と収支予算・運営規程など、合計 10 議案をすべて提案どおりに承認しました。



総会終了後、3 時半から同じ場所でティーパーティ形式の交流会が持たれました。総会をやり終えた達成感と開放感からか、いつにも増してにぎやかなおしゃべりの場となりました。時間と財布の許す人達が、2 次会・3 次会へと流れていったことは言うまでもありません。

そして、11 月 1 日には、愛知県へ認証の申請書類を提出し、無事受理されました。これにより、来年 2 月末頃に「特定非営利活動（NPO）法人」として認証されることが、事実上決定しました。

来年は、ちょうど「チェルノブイリ救援・中部」設立から 10 周年になり、法人化とあわせて、新しい出発の年になります。

決意を新たに、チェルノブイリ事故被災者の救援のために、力を尽くしたいと考えています。（田中）

〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：田中良明

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073（月・水・金 10：30～15：30）

東海村臨界事故の真実

東海村の臨界事故は時間が経つにつれて全体像が明らかになって来た。もえたウラン 235 の量はたった 1mg にすぎないのに、たくさんの被曝者が出た。事故を起こした 3 名の作業員の内 2 名は一ヶ月たった今も依然として重体である。

10~17 シーベルトの被曝は、チェルノブイリの事故処理作業員に近いが、それ以上

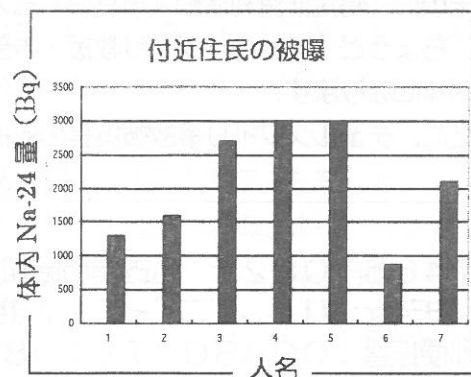
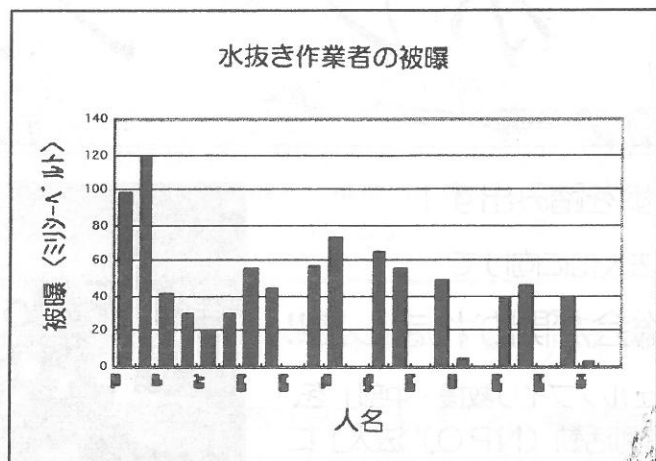
の被曝である。多くの事故処理作業員がすでに死亡していることを思うとき、JCO の 2 名の方の一日も早い回復を願わずにはいられない。

20 時間も続いた臨界状態を最終的に終わらせたのは、18 名の JCO の職員たちによる、決死の水抜き作業であった。彼らは「会社の自己責任による事態收拾」を迫られ、被曝を承知で臨界中の建物に接近した。上のグラフは、彼らの被曝線量を示す。全員作業時間は 2~3 分であつたにも関わらず、自然放射線による年間被曝線量の数十倍から 100 倍の被曝をした。約半数は、放射線作業従事者の年間基準線量 50 ミリ・シーベルトをも越えている。彼らの未来に何が待っているか、チェルノブイリから学ぶことは多い。

今回の事故の特徴のもう一つは、中性子による被曝が多かったことである。国も県も、東海村も、会社も、安全委員会すら臨界は起こるまいと思い、中性子測定器を 1 台も備えていなかった。その結果、不必要な被曝が多く起こった。臨界可能性を予測すれば、中性子吸収剤注入のスイッチ一つで防げた被曝である。設備を許可した国と安全委員会の責任は大きい。

中性子は、物体に当たるとそれを放射化する。右のグラフは事故発生を知らずに、長時間作業を続けていた近くの会社の従業員 7 名の体内放射能、ナトリウム 24 の測定値（ベクレル）である。体の中に放射性物質が出来、体内被曝の原因になった。勿論水抜き作業員や、初めの 3 名にははるかに多量の放射能が出来たはずだがデータの発表はない。

(河田昌東)

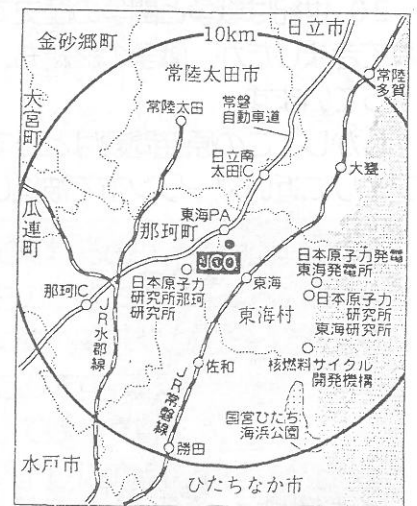
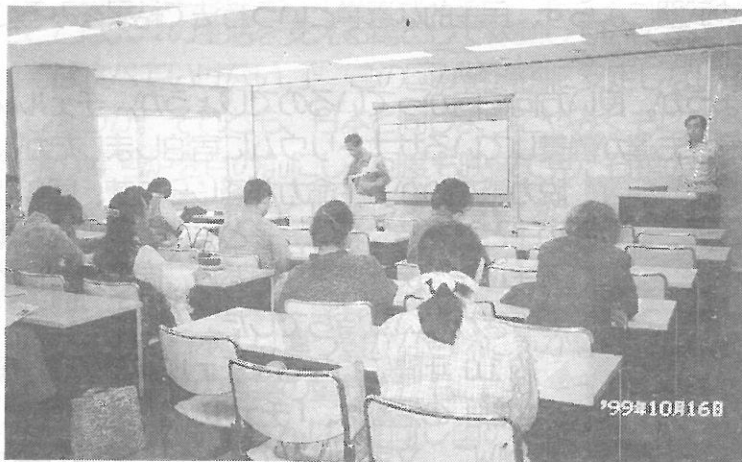


『ウクライナを知ろう連続講座』 第10回 「東海村臨界事故」報告

10月16日(土)の『ウクライナを知ろう連続講座』は、9月30日の東海村の事故で、予定していたテーマ“華麗なるキエフバレエ”どころじゃない事態に、急きょ『東海村臨界事故』報告に変更して行ないました。

名大理学部河田昌東(チェルノブイリ救援・中部事務局長)が、最新情報を整理し、OHPも使ってわかりやすく解説、参加者は一般に報じられている以上の事故の内容、事態の深刻さを知り、愕然としました。

- * 500m避難だと2つの学区にまたがるという理由で、350m圏内が避難対象になったこと
- * 1km地点にある避難所の放射能レベルは、なんと、私達がスタディ・ツアーで訪れたチェルノブイリ原発・石棺間近の見学棟ベランダと同じレベルだった。そこに住民は一日中“避難”させられていたこと
- * 被曝した2人の作業員の被曝線量17シーベルトは、チェルノブイリ事故処理作業者とほぼ同じ(5~20シーベルト)だったこと
- * ウラン235は、固体20kgで臨界に達するが、液体だとわずか780gで臨界になり、20時間もその臨界状態が続いた。それは、通常原発の燃料と違って、高速増殖炉「常陽」の高濃度のウラン燃料を製造していたことから起こったこと
- * 今回燃えたウラン燃料は、たった1mg(耳かきのほんの先ほど)
- * 環境に飛び出した中性子線は、コンクリートでも鉄板でも通して、生物に対する害は、他の放射線より10倍も大きく、その測定器すらなかったこと
- * 工場排気筒から出た希ガスが放射能の雲となり、風下に漂い、5km先でも検出されたこと
- * JCOの職員18人の決死隊が自らの命を懸け、反応を収めるための水抜き作業をしたことなど、まさに“チェルノブイリ”…



東海村の臨界事故(現在のところレベル4)は、事故は起きないとの想定のもと、事故への認識不足、対応の遅れなどから、住民に放射能被曝という重大な被害をもたらしました。見えない放射能の恐ろしさに、地元住民の不安はいかばかりかと胸が痛み、またチェルノブイリ同様、決して事故は他人事ではなく、防災対策の不備等から、住民の安全はどこにも保障されていないことを、東海村の事故は教えてくれました。(京)

次の世代に残すべきものは何か

山根 田鶴子

原発に対して無知であったことを知り、恥ずかしいのですが、その危険性についても、改めて認識した旅となりました。

私は、三人の子どもを通う学校(注:星美学園)が、「チェルノブイリ救援・中部」に協力していた関係上、そのお誘いを受けて参加しました。

どちらかといえば、民主と共産の対立に関心を持っていた為に、「かつての共産圏の姿を、この目で見てみたい」という期待はありました。

革命以来、70年間にわたり、宗教迫害(特にキリスト教)をし、教会という教会をこわしたこの国で、今では再建されている聖堂や復活している信者達の姿に感銘を覚えました。チェルノブイリ原発のあるウクライナ共和国の首都キエフは、中世の香りをただよわせる、とても美しい街並みでした。秋風の吹くさわやかさの中で、聖堂の鐘の音が私の心を清めてくれるような錯覚に陥りました。「いつの日にか、また訪れてみたい。」そんな想いにさせるキエフの街でした。

この地球上には、いろんな国があります。そして、それぞれの国が抱えている青少年の問題は、課題こそ違いますが、共通していることはそれが子ども達自身の責任ではなく、そのような社会を大人達が作ってしまったことにあります。この子ども達が、まちがいなく次の世代を担うのですから、大人達は、変えなければならぬことは勇気を出して変えるべきです。

「次の世代に残すべきものは何か?」を明確にする転換の時はずでにきています。

20世紀は戦争と闘争の歴史であり、核の均衡・抑制力という力の論理で戦いが繰り広げられてきましたが、戦争の終結も、力や武器によらず、民主的な選挙という方法で結果をみるに至っています。

しかし、この原発問題はどうか。良い方向に向かっているのでしょうか。チェルノブイリに近いマーリン市で被災した子ども達が静養しているサナトリウムに宿泊しましたが、



脱力感なのか、生命力が感じられず、同年代の子どもを持つ私は、子ども達の姿に心が痛みました。医薬品不足もあり、同じ親としてやりきれない気持ちでした。

約10年間にわたる「チェルノブイリ救援・中部」の活動は、「チェルノブイリの被災者の心に、文字としてではなく、感謝の涙として記録されている。」そんな実感を持ったスタディ・ツアーでした。

<←プリャチ市の遊園地…この遊園地は、一度も子ども達の歓声を聞くことがなく閉鎖された。>



<汚染地域の町マーリンから来た

子ども達と語る山根さん>

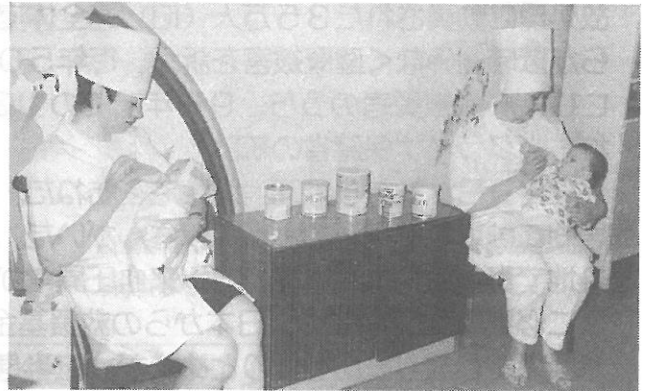
本を読み写真集を開いてでき上がったイメージは、「ウクライナは灰色、チェルノブイリは真っ黒」でした。しかし、旅が始まった途端そんなものはどこかに飛んで行ってしまったのです。

キエフからジトーミルへと走る道には、森があり広い農地が続き、牛や馬がいて、家の周りを鶏が走り回る。「どこに放射能の影響があるの？」 触れる空気からは「事故はまだ終わっていないんだよ」なんて伝わってこない。ただただ、国旗と同じ「麦色の大地と青い空。」

私たちを迎えてくれた消防署の方々は、どこにあのような大事故に向かうパワーがあったのかと思えるほど、穏やかに見受けられました。でもそれは、事故から13年、確実に何らかの影響が彼らに起こっている事実なのだと、今になって感じています。

障害者協会のタビノヴァさんの「また同じような事故があったら、強制ではなく、当時生まれた子どもやこれから生まれる孫たちを守るため、再び行くでしょう。」という言葉に、「命に関わる体験によって、自己に目覚めたのだ」と強く共感しました。そして、ウクライナの女性の強さ・聡明で活動的なところは、生ぬるい環境に身を置く私にとって良い刺激となりました。

特に、市立小児病院を訪れたときに対応してくださった女医さんは、医者を選んだということ以上に、人間的に優れているのだと、小さな心遣いから感じ取りました。この病院は、1,300人の職員のうち、1,000人が女性だそうです。そして、院長以外の各部長に女性が多く勤務していることに驚き、母親達のために、心強く安心できる環境があることを羨ましく思いました。器材や医薬品が揃えばより多くの子どもの心とからだを救うことができるでしょう。



〈市立小児病院にて〉

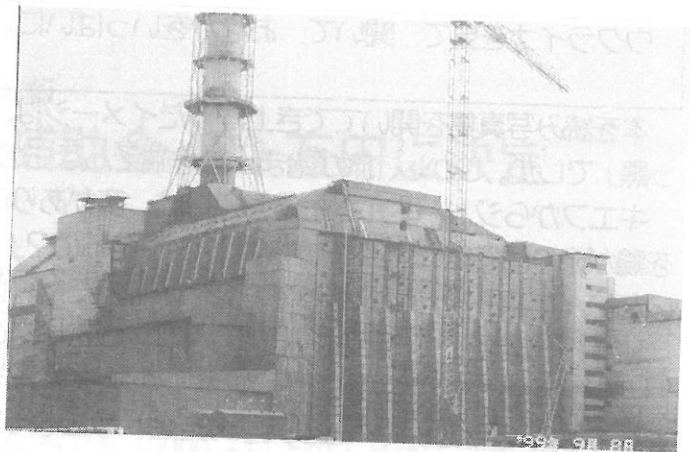
初めて見る原子力発電所は、大きな工場のように、敷地の中の人影もまばらです。しかし、まだここは人々の生活を支える場として稼働しています。「働けば徐々に体が弱っていく。働かなくては食べていけない。」この国が経済的に安定しない限り、原発を止めることはできないのでしょうか。それとも、日本と同じようにやみくもに突っ走るのでしょうか。

問題の4号炉を目の前にし、何度も映像で見た石棺のすぐそばに立ち、そこからの風に当たりました。不思議と怖いとは感じませんでした。危険と知らせてくれるのは、放射能測定器だけ。写真で見た方が、怖さが伝わります。きっと、身近でないものが触れられるくらいの距離に来た時、それは日常の一部となって鈍感になり、ここからすぐ離れて行くのだという安心感で、怖さよりも日本とは違う豊かな自然に気が奪われてしまったのです。

「石棺」は、その言葉の重みとともに、ずーっと私の体験として残るでしょう。

キリチャンスキーさんは、『同じ国の人でも、チェルノブイリに十分な理解がない。8,000kmも離れた日本から、チェルノブイリの被災者を思い、援助を続けていてくれる「チェルノブイリ救援・中部」に感謝しています。』と、距離や言葉を越えて初めてこの活動に携わった私に、人と関わる暖かさを与えてくれました。この旅は、事実を学び、ジトーミルの人々を元気づけるはずだったのに、迎えてくれた人々や一緒に行ったメンバーに、逆に癒されるという幸せな旅行となり、新しい私を発見することができました。皆さんに感謝します。

原発事故から13年目の
ウクライナを訪れて
野上明人



〈老朽化が進む4号炉石棺〉

3年前に次いで2度目の訪問である。前回に比べて、市場に出回る生鮮食品、街で見かける新車、都市部での新改築ブーム、新通貨グリヴナの発行などから、少なからず新国家の息吹を感じ取ることができた。

しかし、平均労働者の月収は約\$60 足らずと日本の1/50 以下であり、購買力からみた物価は依然高いままだ。そんな中で、原発事故の後遺症は重くのしかかっているのだが、残念ながらウクライナ政府による補償（財政難の政府が、各種補助金の削減を進めている）は先細りで、被災者にとっては非常に厳しいものとなっている。かつて事故処理に動員された35万人（旧ソ連全体では70万人）もの軍人・消防士・除染作業者がほぼ例外なく健康被害を訴え、毎年500～800人が直接被曝労働を原因として死亡し、一般被災者のうち、96年までの10年間に17万人近くが死亡している。（いずれもウクライナ保健省の統計）

9月9日、私たちは元消防士宅を訪ねた。この日は彼の41回目の誕生日だったのだ。居間には車椅子に座るポピックさんがいた。彼は事故直後の5月9日から23日まで、汚染地で事故処理作業に従事、以来血圧異常が続き脳卒中で倒れ緊急入院した。しかし、治療に必要な薬品がなく、日本からの救援基金を取り崩して薬品を手配した。2ヶ月の間、意識不明となり一命を取りとめたが、左半身不随となった。7月には車椅子が贈られた。「日本の民間団体からの援助に感謝しています。」と涙ながらに話す奥さんを見ていて、こちらも目頭が熱くなった。本人はリハビリで回復をめざす意志を強くお持ちで、全快を願わずにはいらなかった。幸いというべきか、彼は障害者認定（一級）を受け、わずかながらの障害者年金を受給することができた。しかし大半の作業員は、動員命令や除染作業従事に関する証明書を所持しておらず（というより混乱していた当時は口頭による命令が多かったため）今となっては従事した事実すら証明不可能となり、仮に発病しても何の補償も受けられない始末である。州内からの消防士の事故処理参加者289名中、死亡18名（癌11名・循環器疾患7名）、障害者認定25名（1～3級）だが、全体の中で健康なものはただの一人もいないという。ちなみに障害者年金がつくのは労働能力100%喪失と認められた一級のみである。現在、無人であるはずの汚染地区では、大規模な森林火災が絶えない。強制移住させられたお年寄りを中心に、命令違反を承知で住みなれた我が家に戻ってくるためだ。火の不始末などで火災が発生しても通報者がおらず、担当消防署も遠方のため、消火活動に当たる頃には手がつけれないくらい大規模なものになってしまう。一ヶ月前にも500畝を焼失する火事があったばかりだ。やっかいなことに森林火災は地表や樹木中の放射性物質を再拡散させる働きをする。そんな10～15マイクロシーベルト/時（通常の100倍以上）の汚染空間のまっただ中へ繰り出さなければならない悪循環を、いったいどうやって断ち切ったらよいのか。簡単には答えが見つからない。

人類が核エネルギーと共存することの不条理さを、改めて考えさせられた旅であった。

チェルノブイリから帰ってわずか2週間後に、東海村の臨界事故は起きた。新幹線の車内で見た「…東海村で臨界事故発生…」のテロップに私は打ちのめされた。「救援・中部」が被災者の支援を通じて伝えたかった、「日本でチェルノブイリを繰り返してはならない」という警鐘を、私はどれだけ伝えることができたのか？

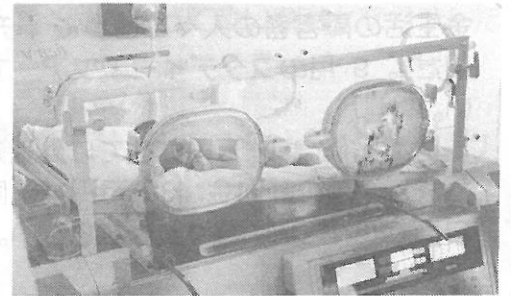
インターネットの科学技術庁のホームページに、被曝者（大内さん）の容体が日々刻々と掲載されている。「人工呼吸を継続中。鎮静剤投与中。放射線によるやけどが背中に回り、浸出液が止まらない。人工の皮膚を移植。腸の粘膜がピラン状態で下痢が続く。下血がはじまる。非常に厳しい状態が続いている。…」 半数致死線量4シーベルト、全数致死線量7シーベルトを大きく上回る17シーベルトの被曝。最高水準の医療のもとで、大内さんの死闘は続く。

チェルノブイリの子ども達、そして事故処理事業者達の声がむなしく病室にひびきわたる。この声を消してはいけない。この声に、日本の全ての人達が、耳を傾けなければならない。

私の脳裏に、やきついて離れないーコマのイラストがある。【…遠くに、事故で廃炉となった原発。目の前には、大人達の墓石が並び、そして、小石を投げつける子ども達。「なぜ、こんな物を僕達に残したの？」…】

次の世代に美しい地球を贈りたい。

しかし、その前に私達はやらなければならない事がたくさんある。



<保育器で眠る未熟児（州立小児病院にて）>

「汚染地での消火活動に、4DW 車が必要なのです！」

戸村 京子

9月8日、チェルノブイリ原発の見学から夜遅く戻った私達が、遅い夕食を終える頃、シトミル消防局長アントニークさんは「皆さんは原発の石棺や30キロゾーンの中へ行ってみてどうでしたか？ 私達、消防士や警察は、日常この中で汚染地を管理したり、森林火災の消火活動などを行なっているのですよ」と、まるで笑っているような目で私達の顔を見ながら問いかけました。遠く安全な日本からやって来て、「汚染地の放射能をどう感じたのか」と聞きたかったのでしょう。

度たび起きる汚染地の森林火災は、周辺の放射能のチリや、放射能を吸い上げた樹木が燃えて灰が飛散することで、放射能汚染がさらに拡大することを意味するのです。

消火活動に従事する消防士達は、事故当時の事故処理事業者のような、吐き気・めまい・脱力感などの急性放射線障害の症状を訴えています。このような新たな被曝を避けるためには、火災の早期発見や現場の状況把握が大切で、そのため、森の中の悪路を走れる無線を備えたパトロール・カー(4DW 車)が必要とされています。

'99年7月に3日間燃え続けた火災では、92名の消防士達が消火に参加、周辺の放射能値は数百倍にもなったということです。最小限の人数で、短時間に消火することでしか、被曝人数と被曝線量をおさえることができないのです。

アントニークさん達の「なんとか4DW 車を！」という訴えを、ポーシェの読者の皆さんにもお伝えし、ぜひ実現させ、少しでも汚染地域での被曝をおさえることに役立てたいと思います。ご協力をお願いします。

外務省 NGO 事業補助金 430 万円に決定

申請書を提出して待つこと半年、まちに待った外務省 NGO 事業補助金がやっと決まった。これで、ナロジチの住民やジトーミル消防局の事故処理作業員、チェルノブイリ障害者協会の人々に今年も医療援助の手を差しのべることが出来る。

汚染地域ナロジチはチェルノブイリ原発から 70K m、移住対象地域なのに政府の資金難で移住政策は数年前からストップ、今でも 10000 人以上の人々が住んでいる。移住は子どもがいる家族優先なので、全国トップクラスの出生率という。しかし、この子たちを待っているのは汚染された食べ物、何という運命の巡り合わせだろうか。ジトーミル州の事故処理作業員やかつて事故処理に参加し、今は退役して年金生活の障害者の人々にとって「チェルノブイリ救援・中部の医薬品は唯一の命の綱だ」。9 月のスタディー・ツアーであった彼らが口々にそう言ったのを今も忘れない。

医薬品代 350 万円はすでに外貨送金され、現地で医薬品の購入が始まっている。ただし、この補助金 430 万円は、同額以上の自己資金による援助が必要で、私たち自身でそれを集めなければならない。皆様のご協力をお願いします。

奨学生のお便りから

オルガ・サバフチュクさん ♡ ♡ ♡

私はオルガ・サバフチュクといいます。ジトーミル教育大学で言語学を勉強しています。1981 年 7 月 11 日にチェルノブイリ原発から 80K m の町、オブルチで生まれました。両親は音楽学校の教師、私は一人っ子です。6 才の時に原発事故がありました。この時から、色々な病気が私を襲うようになったのです。甲状腺肥大、扁桃腺炎、免疫力減退など。完全に健康な友人なんか一人もいません。私が今最も困っているのは、突然の疲労といらいら、集中力の減退です。小さいときから私は子どもが好きだったので、教育大学に入りました。他の人と喜びや悲しみを分かち合うのが大好きです。毎日、私は人間についてたくさんのことを学びます。人々と協力しあい、自分に出来ることをしてあげるのが好きです。悪い人なんかいないと思います。ただ、その人の欠点を見ないで、良いところだけを見てあげることが大事だと思います。私は静寂が好きです。音楽はクラシック、バッハが好きです。四季折々に、生まれ故郷の自然に親しむのが好きで、そのとりこになってしまいます。一番大きな私の夢は、人々が互いに愛し合い、世界から争いや戦争が無くなること。人々の親切がだんだん分かってきました。そして、そのような人々はどこにもいるということも。例えばあなた方のように。奨学金本当にありがとうございます。本当に助かります。

竹内さんのウクライナ便り

(チェルノブイリ救援・中部 キエフ駐在 竹内 高明)

西側諸国の資金難による、ウクライナの原発の「2000年問題対策プロジェクト」が発足。このプロジェクトに参加しているアメリカの原発専門家によれば、原発の安全性を脅かす問題や原発の自動停止は起こらないという。起こりうる最悪のケースは、局所的な数時間の停電。しかし英・米・仏の各大使館は、在ウクライナの自国民に対し、新年をウクライナで迎える場合には水、燃料、食料等を備蓄するよう促している。(『イタリヤ・ハラルド・レビュー』8月21-22日号)

9月16日、チェルノブイリ原発の「液状廃棄物再処理工場」建設に関する契約書が調印される。この工場の建設は、チェルノブイリ原発の廃炉化に関連するもの。同プロジェクトへの融資は、ヨーロッパ復興開発銀行が行う。契約は、エネルゴアトム社及びチェルノブイリ原発と、入札の結果選ばれたベルギーのベルガトン社、フランスのSGN社、イタリアのアンサルド社との間で締結される。(『イタリヤ・ハラルド・レビュー』9月17日号)

チェルノブイリ原発周辺の「30kmゾーン」で放射線モニタリングに関する国際実習が開始された。コパチ(コパチャ?)村付近にイギリス、ドイツ、フランス、スロヴァキア、チェコ等の移動研究室が開設され、土壌と植物の外部・内部放射線レベルを調査中。その他、各種の昆虫・動物についての詳細な研究も行われる予定。(同紙9月18日号)

「ウクライナの原発でのトラブル発生率は、原発事故の国際基準に照らして世界的平均を超えてはいない」と、ウクライナのエネルギー省副大臣A. チェルノフが、ウクライナ原子力業界の会議「軽水炉原発の近代化」で発言。近年、ウクライナの原発では、国際基準でレベル4~7に分類されるトラブルは一件もなかった。およそすべてのトラブルは、レベル0の評価にとどまるもの。原発にとって最大の問題は、電力消費者の料金未払である。今年前半の料金支払率は、生産電力の66.8%分にすぎない(前年同期には84.8%)。「エネルゴアトム」社に対する消費者の負債は、現在26億グリヴナに達している。(同紙9月22日号)

共同通信の杉崎さんは10月、キリチャンスキー氏に頼まれて私が通訳した日本の新聞関係者の一行(読売、日経、産経、北海道新聞)にいた人で、東京外語大学在学中に2年間モスクワに留学、共同通信に入社後モスクワ支社に3年いたという人で、すばらしいロシア語ができ、キリチャンスキー氏に見込まれてずいぶん氏の話が聞かされていたようでしたが、取材の姿勢もなかなか好感のもてる人で、こういう記者さんが日本にいるのは、喜ばしいこととと思ってしまいました。他社の人達は、ウクライナがプログラムに入っているので「まあ来た」という感じで、他にすることもないから大統領選の取材でも、ということで大統領候補に会ったり、選挙戦の相当みにくい実態について聞かされたりなどしました。

最近グリヴナ・レートはまた下がり始め、ついに1ドル=5グリヴナに至りました。気温は零下に入りました(-8℃という日もありました)が、まだ比較のおだやかです。



<大統領選挙の集会(キエフにて)>

見えない恐怖 街を支配



放射線量の測定を受ける住民ら。30日午後6時15分、茨城県東海村の舟石川コミュニティセンター

東海村被ばく

ふりいとく 枚方市 (AT.さん)

東海村の事故の後、ポーシェが送られてくるのを待ち遠しく思っていました。そして、やはり尹っていたより凄いいことだったのにと、数字を見て改めて実感。作業員の方の被曝線量が、そんなに深刻なものだとは知りませんでした。いや、ほんやり想像はできても

の事実をはっきり示されるまでは、認めたくなかった、知りたくはなかった、というのが本
かもしれません。本当に、「半数致死線量が4Sv」だと、なぜ報道されないのでしょうか。
テレビをめたにつけない我が家では、事故の翌日、朝刊の「臨界続く」というトップ記事
恐ろしいことが起こったことを知りました。早速テレビをつけて、早朝の「終息宣言」を知
一安心。乳児を抱えており、もしも前夜そんなことを知っていたら、生きた心地がしなか
かもしれません。私達は大阪に住んでいますが、その日も普段と変わらぬ一日。午後、水
二住む友人に電話をしました。「自分達は、十数キロの所に住んでいて、外出自粛勧告の区
はないが、長男の通う高校は十キロ以内なので休校、下の子達は学校に行っているけれど、
は家で一日中ずっとテレビをつけ放しているのよ。」と話していました。「小学校に上
ばかりの末の女の子が、事故地から9キロの所にある植物園に、当日の朝から遠足に行
一日過ごしていたのよ。」と彼女は心配そう。「ひどいね。通報もなかったのね。」と言
「この辺の人は、そんなこと何も言わないのよ。」と彼女は言います。「東京や大阪の人
マ言ってくれるけど、肝心の地元の人達は、人が良いというか、上の人の言うことをおと
聞けばいい。もっと色々発言していかないといけないのでは？」と、東京から移り住ん
彼女は語っていました。
地のだ真ん中に、核燃料を扱う工場があり、さらにその工場の安全管理がずさんだっ
には、驚くと同時に強い怒りを感じます。幸い爆発などの大惨事はまぬかれたものの、
事故は、一つの警告だったように思われます。原子力行政の見直し、核燃料を扱う現場
管理の再確認とともに、万が一、事故が起きた時の通報体制の強化、住民への情報提示
していただきたいと思います。
的に、私達はどうしたらよいのでしょうか？ 皆で考えていきましょう。

チェルノブイリ救援・中部の会計報告(99年4月-99年9月)

収入の部			支出の部				
項目	金額(円)		項目	金額(円)			
前期繰越	4,366,890		救援物資関連	小計 7,249,951			
救援寄付金	小計	8,228,232	(内訳)	医療機器(麻酔器など)	2,970,197		
	(内訳) 個人(367件)	7,829,062		医薬品	3,923,140		
	団体(9件)	399,170		輸送費(重椅子など)	356,614		
国際ボランティア貯金交付金	6,171,000		特別事業費	小計 2,293,888			
外務省ODA補助金	5,600,000		(内訳)	ナロジチ病院暖房設備費	1,271,328		
運営費関連寄付金	小計	4,134,240		奨学金第1回給与、事務経費	296,100		
	(内訳) 個人(87件)	324,240		移住基金業務委託費など	726,460		
	団体(7件)	3,810,000	運営費関連	小計 2,551,285			
物品売上げ等	49,800		(内訳)	郵送通信費(ポレ発送含)	686,330		
預金利子	15,002			電話代	201,833		
/				印刷費(ポレ印刷代含)	264,592		
				国内出張旅費	83,903		
				会場費	12,580		
				会議費	1,814		
				消耗品費	48,228		
				人件費	819,375		
				家賃光熱費	291,090		
				振込手数料	57,490		
				広告宣伝費	45,000		
				雑費	39,050		
						為替差損	10,768
						総支出	12,105,892
				当年度収入合計	24,198,274		次期繰越し
			収入総額	28,565,164		支出総額	28,565,164

◎以上の通りご報告致します。なお、次期繰り越しの中、事故処理作業者協会、チェルノブイリ障害者協会、ナロジチ病院への支援、粉ミルク援助など約1000万円は支出予定です (会計担当：松田幸枝)

◎上記期間の収支計算書ならびに諸帳簿の各内容を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明致します。(会計監査：南和也)



『チェルノブイリの祈り…未来の物語』
(アレクシエービッチ著 松本妙子訳 岩波書店)

あの事故は何だったのか? どんな思いを胸に秘めて、
あの日から生きてきたのか? 人々が語る、放射能に
侵された大地、人々の愛と悲しみ…チェルノブイリ。

事務局だより

今年は10月に入ってから、郵便局関連の集まりで「活動報告」をする機会が多かった。「昭和地域国際ボランティア貯金NGO報告会」、「天白地区郵便貯金者の集い」、「名古屋東地域国際ボランティア貯金推進協議会」に招かれ、チェルノブイリの活動内容や今年度のボランティア貯金交付金の執行状況についてお話しした。これらの会での報告を要請された際、9月に起きた東海村の「臨界事故」の事も絡めて、というお話もあり報告者としては（河田事務局長が昭和区へ、山盛は天白区、東区に伺った）話に一層力が入った。会の参加者は合わせて175人程だったが、どの会でも熱心に耳を傾けて下さった。原子力災害がいかに多くの犠牲者を生み出し、そして長きにわたって人々を苦しめるかということに今更ながら驚きをもたれた方が多かったようだ。このようなNGO報告会を開催するのは初めてという主催局の方々は、またこのような会を持ち、ボランティア貯金の交付金がどのように役立っているかを広く伝えたいと言われた。報告会ではないが、桑名の郵便局ではチェルノブイリのパネル展等も行われた。報告会でもパネル展でも、このような機会は積極的に参加していきたい。「チェルノブイリ」が未知の出来事である人々にこそ、伝えたいことがあるから。（山盛）

広告 その1 一家に一台 放射能測定器！ 「シンテックス」1台1万円（格安）

東海村の事故でも分かる通り、放射能漏れ事故が日本で起きても正確な情報が住民にすばやく伝わるとは限りません。測定器が備えられていなかったり、またはパニックを避けるという理由で情報操作が行われたり…!? 悲しいことに自分の身の安全は自分で守らねばなりません。

そこで、ウクライナ製放射能測定器はいかが？ 一家に一台、原子力時代に生きる私達の必需品!!（そうでなくなる日を祈りつつ）

広告その2 一家に一冊 原子力災害避難マニュアル本 800円/冊（格安）

アメリカ・コネチカット州原子力発電所非常事態対策ガイド。“近隣住民の方々へのガイドブック”という、コネチカット州の原子力発電所発行の防災マニュアルです。

避難する時の具体的なチェックリストなど、備えあれば憂い無し!? 日本の無策とアメリカの現実的対応策は大違い!!!

編集後記

☆ 最新鋭の医療チームが、放射能被曝の患者をケアしている。私は医療レポートをみながら疑似体験をする…日を追うに従い、しだいに衰弱していくAさんが見える。（美）

☆ バザーで初めて“売る側”を体験した。フルタイムの現状を、にわか知識で伝えるのに苦勞しながらも、小さな喜びを見つけ、また運営資金を捻出する大変さも知った。（かよ）

☆ もし浜岡原発で事故が起きたら？ 来年2月に予定されている県の原子力総合防災訓練に対し、地元の人達はより現実性のある計画を求めて交渉中。この訓練に連動して、私達も各地で自主防災訓練をやりませんか？ コネチカット州のマニュアルも参考にして。（京）

☆ 10月から、尼崎に単身赴任となった。娘は岐阜に下宿。「とうとう、一家離散だね」と妻。「一家悲惨、じゃないの？」と娘。「土日が新鮮な家庭になったな。」と私。（J）